蚕業の先駆者を輩出した上田市上塩尻の集落と民家

小林昌人

第１図　上塩尻大村の景観（提供清水憲之助氏
撮影折井正彦氏　昭和40年頃）

一　はじめに

長野県は「製糸王国」とまで言われ、蚕糸業が盛んであった。その中でも上田市は松本市に次ぐ商都で、その経済的基盤となったのは周辺の蚕業であった。その隆盛さは「蚕都上田」とまで呼ばれたほどで、この地方の経済を初め政治や文化などにも大きな影響を及ぼすと共に全国的にも知られた。その現れの一つはわが国が蚕業の振興に力を注ぎ蚕糸専門学校を三校設けたその一校を上田に設けたことでも明らかである。その「蚕都上田」の中でも上田市上塩尻（旧小県郡塩尻村）は蚕種商人が大勢住み全国屈指の蚕種の本場として栄えた村で次の点が特筆される。

１　蚕書と蚕業先駆者を輩出している。

江戸時代に蚕書が全国で合計百余点刊行されているが、内五点が上塩尻の左記の蚕業先駆者三人によって刊行されている。また乾湿計も当地で発明され製作・販売された。

塚田与右衛門　正徳五年（一七一五）～文化七年(一八一〇)

『新撰養蚕秘書』『養蚕後編』

藤本善右衛門　文化一二年（一八一五）～明治二三年(一八九〇)

『続錦雑誌』『蚕かひの学』

清水金左衛門　文政六年(一八二三) ～明治二一年（一八八八）
　　『養蚕教弘録』『養蚕乾湿計用方』　養蚕乾湿計の発明、蚕網の考案
２　蚕室造りの居宅と専用蚕室が昔のまま現存している。
　江戸から明治に亘る各年代に建てられた蚕室造りの居宅および専用蚕室が約五〇棟現存している。その形は大別すると次のとおりである。
(1)茅葺きの家を養蚕用に改造した家
(2)茅葺きの屋根の一部を改造して蚕室造りにした家
(3)茅葺きか瓦葺で最初から二階建て蚕室造りにした家
これらの蚕室造りは前記先駆者が自身で設計して建てたり、その指導や影響の元に作られている。したがって、各時代の養蚕技術が民家に及ぼした影響の実証になる。
　壁の仕上げは、真壁造りが普通だが他の農村に比べて白壁の大壁造りも多い。このほかに、白壁の塗り籠め造りの蔵が殆どの家にある。また、長屋門、四脚門など門構えが立派な家がある。
３　蚕室造り集落と北国街道の家並みの景観が美しい。
　蚕室造り居宅と専用蚕室が棟をほぼ東西の方向に向いて並び美しい集落を作っている。その間に白壁の蔵が点在して景観に変化を与えている。
　集落の山手側は昔のまま旧北国街道が通っている。この街道はかつて加賀藩主前田公参勤交代の行列をはじめ善光寺参り、佐渡の金の運搬、当地名の起こりの「塩の道」としても大勢の人が往来した。
　街道がここを通過する辺りは、地形が起伏し、ゆるやかに曲がりくねっている。街道に沿った両側は石垣が美しく築かれ、北国街道のたたずまいをよく残している。また加賀藩主前田公が休息所とした家も残っている。
　なお、街道から脇に入る幾つもの小路は僅かに曲がり、どこを眺めても蚕室造りの家々や蔵が棟を寄せ合い、狭い土地にお互いに協力しあって栄えてきた生活ぶりを偲ばせる。
　しかし、このように貴重な集落と民家が今まで総合的に調査記録されていない。よってここに概要をご紹介する。

二　村の概観と社会構成

　上塩尻は現在上田市に合併されているが、以前は小県郡上塩尻村であった。位置は、村の西端にあるＪＲ西上田駅の名のとおり、上田市の市街地の西にある。
　地名の由来は、日本海および太平洋側から運ばれて来た塩の終着地点つまり塩の尻であった。また両方の塩が出会うため「塩合いの里」ともいわれた。
　地形は、北側が虚空蔵山(一〇七七メートル)、南側は平地で、その南は西に流れる

千曲川になっている。

上塩尻の西には千曲川を挟んで下塩尻と対岸の半過には岩鼻と呼ばれる岩山がある。岩鼻と対岸の山との距離は五百メートルほどに迫っている。このため、ここから上田盆地に吹き込む西風は、強い風となって上塩尻に吹きつける。これを「塩尻のカラッ風」といい、当地では有名である。この西の卓越風のため上塩尻の木々の枝は東になびいている。しかし、この西風が桑に当たりキョウソ（蠅の一種カイコノウジバイ）が寄りつけず、蚕種用の蚕に与える歩桑の栽培に好適となっている。ひいては上塩尻が全国屈指の蚕種の産地となる自然環境的一因となった。

耕地は、北側が山、南側は度々氾濫する千曲川に挟まれて狭い。このため豊かな農耕地が得られず、言い伝えに「三ばい九つ」（団子三コ入った団子汁三ばいが夕食）と言われたほど貧しかった。この農耕地の狭いことと貧しさは村人に頭を使って仕事をすることが大切であると認識させた。頭を使う現れの一つが後述するように真言宗の寺を建てたことである。

村の組織は、大村、元宿（旧利根島）、三田所、新屋の四つから成っている。村の形は概略四角で、これを東西に三分できる。

大村は、北側の三分の一に当たる所で、虚空蔵山の南麓の傾斜地である。北側は山林、南側は国道十八号で、東西に長く、中央を北国街道が通っている。大村はさらに縦割に五つの組に分けてある。それは東から上手、中手、下手、下村、龍の口である。家は概ね本家が上の方に屋敷を構え、分家は下のほうに新宅を建てている。中にはより広い屋敷を求めて平地部に引っ越した家もある。

元宿は、村を東西に三分した中の部分に位置する。北側は国道一八号、南側は信越線で区切られ東西に長い船形をしている。元宿は利根島とも呼ばれた。ここは平地ではあるが周囲よりやや高く、地名のとおり元は千曲川の中島であった。昔は大村と利根島の往来は舟でしたという。しかし、その時代は何時か不明である。

三田所と新屋は、村を東西に三分した南の部分に位置する。北側は信越線で、南側は千曲川になっている。三田所は信越線の南沿線にあり、新屋は三田所の南に田畑を隔てて千曲川寄りにある。新屋は名が示すとおり大村や元宿よりも後になって住むようになった集落である。

地目名は、灰塚、三反田、六反田、腰畑、横堤、丸田、社宮地、社宮神などあると言われる。

地図によっては前記の村（集落）名の一部と地目名の一部が同列に混同して記載してあり、しかもどちらも全てを網羅していないのでまぎらわしい。

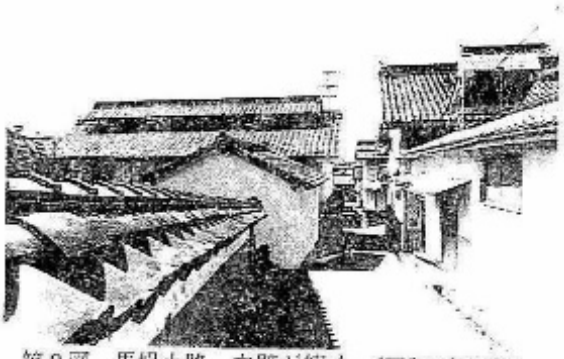
村の運営は、江戸時代は庄屋が任に当たった。現在は区長が務めている。

蚕種商が多かったが蚕種業については無碍な競争はしないように藤本家が取り締まった。

三　北国街道と村みち、小路

北国街道は、江戸時代には岩鼻の崖のやや上の方を通っていた。ここは「岩鼻の嶮」として難所であり、加賀の前田公はここを無事越えると国元へその旨飛脚をたてたと伝えられる。またここは上田藩と坂城藩の境であり交通上の要害地で、塩尻には口止番所を置いた。岩鼻の山頂には城郭や砦、狼煙台などがあった。岩鼻の北の鼠宿は「不寝見」の意とされる。

上塩尻の大村を通過する北国街道は、東から進むと、左側の清水鈔一家の北裏辺りからなだらかな登り坂となる。右側には馬場信一家の石垣が続いている。左手には小路が白壁の家々を左右両側に連ねて下り、その先に上田盆地が眺められる。この雰囲気は三州足助宿のマンリン小路を連想させる。この小路は馬場謙二家はじめ馬場家一族の家が多く並んでいるため馬場小路と呼ばれている。



第２図　馬場小路　白壁が続く　（昭和62年撮影）

馬場信一家の長屋門の西は右から沢が流れ下り、この流れに沿って小路がある。この小路の西側には高い石垣と坂道があり、その上に滝沢章蔵家の立派な門と見事な松が見える。この小路の上には虚空山東福寺がある。このためこの小路を寺小路と呼んでいる。

街道は清水和衛家の南辺りで最も高くなる。この家は江戸時代は庄屋をし、加賀の前田公が休息所とした家である。建物は現在も当時のままである。

前記の川は街道の下を抜け、街道の南側に沿って西に流れる。その対岸には佐藤家の総本家である前記の藤本善右衛門家（代々善右衛門を名乗る）の屋敷の築地塀が続いている。

街道は佐藤忠生家の前で二叉路となり、川とも分かれ、それまでゆるやかに左に曲がって来たが急に右に曲がると共にやや急な下り坂に変わる。この辺りの路の曲がり具合や登り下りの変化は草鞘履きで往来した人々も飽きさせなかったであろう。

佐藤忠生家と西の山崎康彦家は高い石垣を築きその上に粗壁の土蔵を建ててある。

路はその下をなおも西へと下って行く。その両側にも家並みが続いている。これを先の方まで見通す眺めも昔の街道の佇まいである。この坂道を少し下りて振り返った眺めも美しい。

山崎康彦家の西の小路は毘沙門様があったため、毘沙門小路という。この小路も曲がっていて、小路に入って見ると上も下もどちらを見ても風情がある。

この村の小路にそれぞれ名前があることは、便利だというだけではなく、無意識のうちにも、それぞれの小路に美しさを感じ、愛着を持っているためではないかと思われる。最近とかく地名を少なくし、番地の数字で表す頻向があるが、仮に前記の小路を番号で呼ぶとしたならばそれは不便で味気ない。

毘沙門小路を奥に登った所に上塩尻神社がある。毘沙門小路の南側にあった佐藤敬五家は最近解体され街道の家並みが歯抜けとなった。佐藤敬五家から西に二軒目の北沢範夫家は切妻の妻入りである。当地では切妻で妻入りの家は珍しい。さらにこの家の表は格子がはまっている。街道に面したこの辺りは以前は格子が多かったと言われる。しかし、現在、格子は見られなくなってしまった。

北沢範夫家の西の馬場桂三家は、街道に面した立派な門構えの家で、居宅は飛び石を伝った奥にある。この居宅は、小岩井林太郎氏が明治時代に建てた蚕室造りで、茨城県に移住したため馬場家が購入した。屋敷の西側は小路で、これにそって北に蔵、蔵の南に居宅が並んでいる。この蔵と居宅の壁は羽目板で覆われている。特に居宅壁の西南端は袖壁のように南に延長している。これは西風を防ぐためである。蔵と居宅の間の庭に植えられている赤松の枝は西風で東になびいている。これを見ても「塩尻のカラッ風」の強さがうかがえる。この小路の景観は北から見ると蔵造り、南から見ると防風用袖壁が目をひき、どちらから見ても美しい。

馬場桂三家前の表庭に立派な松がある家は佐藤勇二家である。この家は沓掛洋一氏が明治時代に建てた蚕室造りの典型的な居宅である。

この先へ北国街道の北側に沿って蚕至造りの家が静かなたたずまいで並んでいる。

四　神社・寺・一族の氏神・墓地

(1)神社　上塩尻の東寄りの山の中腹に座摩神社がある。祭神は「保食神」である。しかし、奥殿の御神額には「座摩神社正一位蚕養国大神」と記されている。ここに社殿が作られたのは寛文年間（一六六一～）で、明治二九年に修復されている。祭日は八十八夜である。この祭は「お舟の練り」や「相撲」をし、お札を授け、お練り舟の上から繭玉を撒いた。農村の祭としては大変盛大に営まれ、当日は近在近郷の人はもちろんのこと蚕種商は得意先の人を県外からも招待した。これについては上田民俗研究会『上田盆地』第 18 号（昭和五四年六月）に高遠直一氏が「座摩神社　祭礼覚え書

き」と題して詳しく記している。
(2)寺　大村の集落の最も上に真言宗虚空山東福寺がある。伝えによれば、この寺は元亀二年（一五一七）に建てられた。それまでこの村は貧しくて寺は建てられず、仏事は坂城の曹洞宗耕雲寺と上田の浄土宗芳泉寺（上山市常磐城三―七―四八　住職柳楽直純氏）で行っていた。檀家は、耕雲寺が佐藤家、春原家、菅沼家、清水家の一派など、芳泉寺が馬場家（前記馬場謙二氏が檀家総代）、清水家、山崎家などである。これは現在も変わりなく、菩提は両寺に置いていながら別に寺を建て、真言宗にした理由は、当時、耕地が狭く貧しい村を豊かにするためには学問をしなくてはならないと考えたからで、真言密教は文学・医学・工学・儒学を教えてくれるからという。この学問への熱意と学んだ成果がこの村を後に栄えさせた一因とされる。なお、東福寺は茅葺きであったが昭和五三年原因不明の火災で焼け、縁起や記録も失った。現在の本堂はその後の再建である。
(3)一族の氏神　この村では各家とも一族の氏神を持っている。
例えば、
　佐藤家一族の氏神としては上塩尻神社が村の北の山腹にある。
　原家一族は利根島の中程に境内を二尺ほど地盛りして社殿を建ててある。燈籠には寛政二年（一七九〇）の年号がある。今はないが社殿の東脇には大きい欅があった。枯れた株がその大きさと古さを示している。
　小岩井家一族は小岩井紬房の裏山にお稲荷様を祀っている。
　清水家一族は清水七廊といわれ、昔は七家あり、氏神は東福寺の東の山腹にある。
(4)一族先祖祭り・共同墓地　各家共に一族の結束は固く、毎年決まった日に会合や祭を開いている一族がある。例えば、
　清水家一族は一月一一日を祭日としている。
　馬場家一族は二三家あり、二月四日を先祖祭の日と定め、毎年持ち廻りで当番の家に集まっている。
　これは一族が結束してご先祖を尊ぶ精神にも現れている。それは一族の共同墓地があることでも窺える。例えば、滝沢家一族、馬場家一族、清水家一族の共同墓地は村の東寄りの山林の中にある。
　馬場謙二家にある同家一族の共同墓地の図面によれば一族二三家分の墓が山裾に等高線方向にそって数段に長く続いて集まっている。各家の墓は家毎に区切ってはなく飛び飛びに散在している。これは長年の間に何代もの墓が次第に作られてきたことと一族が一家族のようにまとまっていることを示している。

五　民家

日本の民家の一般的な原形は、寄棟造り、切妻造り、入母屋造りの三つがあるが、養蚕技術の発達の結果、日本の民家の造りは著しい影響をうけ、様々な形に変わった。これについては「民家の経済とのかかわりと生業への適応―養蚕家屋を中心に―」（『民俗建築』第 85 号　昭和五九年六月）で、また、蚕書が民家の形に影響を及ぼした内容については「蚕業技術と民家―蚕書に記された蚕室の構造と編年―」（『民俗建築』第 94 号　昭和六一年一月）で述べたので本稿では詳しいことは省く。

江戸時代の養蚕は主屋で行われた。しかし、蚕を育てるのは難しく、このため蚕の育て方に関する研究は盛んとなり養蚕技術書（蚕書）が元禄時代ころから発刊されている。前記の上塩尻の先駆者達の著書もその一部である。この本によると、蚕が丈夫に育つためには、空気がきれいで、風通しが良く、適温、適湿にすることが最も必要であることを説いている。このため母屋を養蚕に適すように高窓や気抜き暖炉を設けるなどの改造をした。

次に、繭の生産量を少しでも増やすためと作業をし易くするための工夫をした。屋根裏空間の利用、さらに技術が進むと、屋根を高く上げて二階を作り、ここを蚕室にした。

明治時代になると初めから二階建ての蚕室造りの居宅を建てるようになった。また、母屋とは別棟に養蚕専用の蚕室を建てるようになった。上塩尻には、江戸時代から明治時代にわたって建てられた民家がほぼ以前のまま現存している。次に例をあげる。

1　茅葺きの家を養蚕用に改造した家

上田地方の民家は江戸時代には茅葺きの寄棟造りが普通であった。その一軒、東福寺の南下にある滝沢章蔵家は上塩尻に現存する民家では最も古いとされる建物である。現在は屋根をトタン板で覆っているが元は茅葺きである。棟には養蚕のための気抜きの小屋根が一つ付いている 家は南向き、東側が土間で、西側が床上部である。通り土間の東側が物置、土間の奥は板の間の台所である。床上部は台所に面してヒロマ、その上手はナカノマとヘヤさらに上手にザシキが二間、田の字形にあり、さらに表側の上手にヘヤを増築している。この家のザシキの天井は水平に板を張らず屋根裏面に平行して斜めに張ってある。また、建具の上の壁面には高窓を設け引き戸にしてある。欄間も引き戸を立てている。さらに、柱には蚕棚を装着させる受け板も打ちつけてある。

この家は外観上は気抜きを除いて建築当初と変わりないように見えるが家の内部を養蚕のために改装をした初期の家である。

なお、この家は滝沢家一族の総本家である。同家には小諸藩の家老の家から嫁いで来たときに乗った籠がある。また、家の北裏は石垣で、その上に畠がある。この畠の

西隅には屋敷神の稲荷の石祠がある。

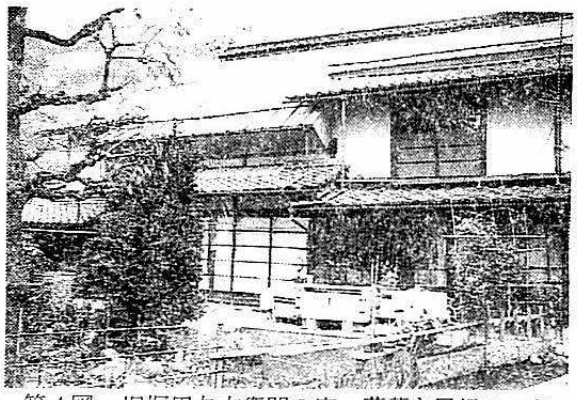
第３図　滝沢章蔵家　茅葺き屋根に気抜きを付け養蚕　（昭和63年撮影）

２　茅葺きの屋根の一部を改造し二階を作って蚕室にした家

(1)北国街道の北側に面し、寺小路の入り口角にある馬場信一家は元は茅葺き寄せ棟の家である。この家は、元は清水長左衛門の家であった。長左衛門は一族の総本家清水喜左衛門家（当主鈔一氏）の分家で、蚕で財を成したがその後、財をなくし、この家を馬場家に譲った。この家は南向きで、四側が土間、東側が床上部である。この西側の屋根を瓦葺きに改造して二階建ての蚕室にしている。

(2)内山元二郎氏が住んでいる家は、現在愛知県に居る塚田茂男氏の持ち家である。塚田家の先祖は前記の塚田与右衛門である。与右衛門は、『郷土の蚕業　養蚕・製糸』上田市立博物館（昭和五六年三月）によれば当塩尻村の出身と書かれている。他の説では、埴科郡中之条（現坂城町）の塚田家から現姓を以て滝沢家に養子に入った。このため塚田家は滝沢家と同族付き合いをしている。また、一説には、与右衛門は朝鮮出身の優れた技術者であったとも言われている。この家を建てたのは清水重兵衛である。重兵衛が建てた家は茅葺きの寄棟造りであった。この家は南向きで東側が土間、西側が床上になっている。その後、この家はヒロマの上から東側の土間上部にかけて屋根の一部を瓦葺きの二階に改装し、蚕室にしている。

この二軒は、改造して二階蚕室にした家で、最初から二階を蚕室として建てる以前の例である。



第４図　旧塚田与右衛門の家　茅葺き屋根の一部を改造して２階を蚕室　（昭和63年撮影）

３　茅葺きか瓦葺きで最初から二階建て蚕室造りにした家

(1)馬場謙二家は江戸時代末期には生糸商をしていた。この家は瓦葺きで最初から二階建て蚕室造りとして作られた。明治二年の平面図が保存されている。間取りの基本部分は現在もこの図面と殆ど変わっていない。この家を建てた人は松本から養子入りした義徳で、実家が材木商であったため、用材は全て実家から運ばせた。このため材質が良く、狂いがないという。柱は松本で刻んだときは現在よりも長かった。それを当地は風が強いため柱を立てるとき全て一尺五寸切り縮めたという。棟の上には二つ気抜きの小屋根がある。天井は根太天井で、この上を二階にし、蚕室にしてある。ただし、ザシキの天井だけほかの部屋よりも高く、棹縁天井である。このためザシキの上だけは二階の床が高く、ここは蚕室にしていない。南側は瓦葺きの下屋があり、蚕室の前だけ下屋の上に板の通路を作ってある。これは二階の養蚕の作業性を良くするための工夫である。壁は白漆喰塗りである。大屋根の南側の庇の下はクリジャバラのように曲面仕上げになっている。東側には袖壁がある。

第５図　馬場謙二家　瓦葺きで最初から２階を蚕室　（明治２年建立　昭和62年撮影）

この馬場謙二家は最初から二階に蚕室を設けて建てるようになる初期の建物である。

(2)国道の上塩尻の信号脇の佐藤裕信家は、明治一二年清水金左衛門が次男官蔵を分家したとき建てられた。そのとき金左衛門は官蔵に「この際身をつつしみ、仕事に精を出すこと」と書面に認めて渡している。その書面が清水憲之助家に保存されている。現在は棟上の気抜きを取り除いているが、以前には気抜きがあった。

この家も最初から二階を蚕室にして建てた明治の建物である。

(3)元宿の清水哲彦家は明治二八年に建てられた茅葺き屋根の二階建て蚕室造りである。明治二〇年代には在葺き二階建ての蚕室造りの家が多いが、この家のように茅葺きも作られたことが判る。この家を建てた棟梁は木曽の武居初太郎である。現在はトタン板を被せてある。上には気抜きの小屋根が一つある。なお、上塩尻の気抜きは、一つ、二つ、三つ以上、棟全体に亘る箱棟式などさまざまな造りがある。また、気抜きの空気調節の形式は、引き戸式・回転式〔唇戸式〕上下移動式などがある。

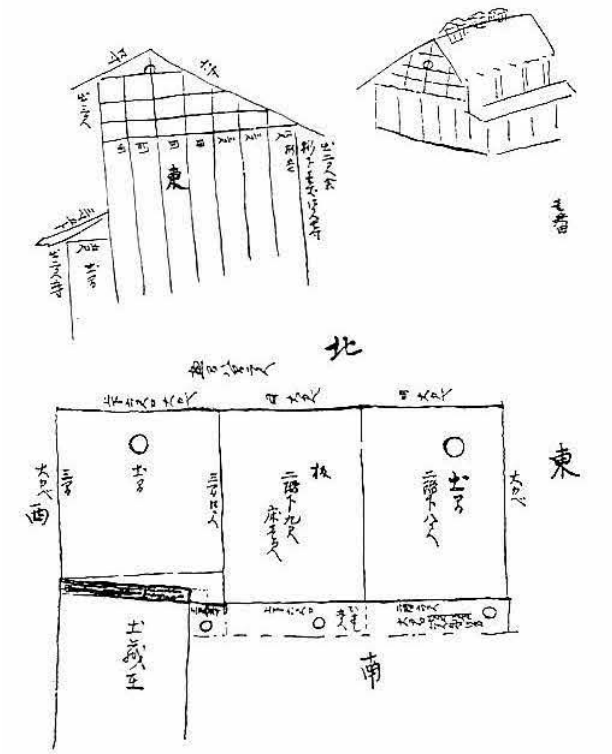
第６図　清水哲彦家　茅葺きで２階を蚕室
（提供清水家　明治28年建立　大正時代撮影）

当家には長屋門がある。これを建てた棟梁も武居初太郎で、明治四〇年代に建て、棟書きを残している。

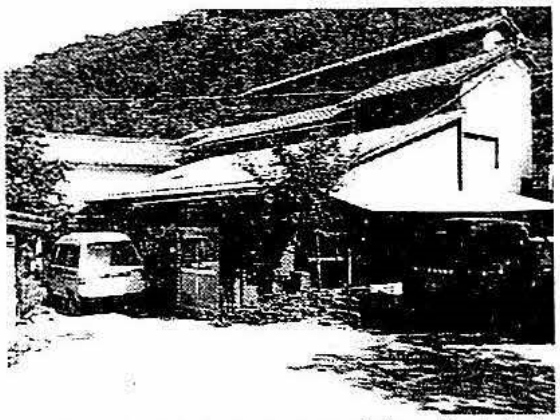
なお、清水哲彦家の屋敷構えを大正時代に撮影した写真がある。これによれば、同家の南側は桑畠になっている。現在ここは住宅が立ち並んでいる。

４　専用蚕室

清水憲之助氏が保存する清水金左衛門の資料の中に金左衛門が自ら描いた蚕室の平面図と外観図がある。図面に年号は記されていない。同家にはこの図面によって建てられた蚕室が現存している。図面と建物が両方揃っているのは文化財として大変貴重である。



第７図　清水金左衛門の蚕室設計図



第８図　清水憲之助家蚕室　清水金左衛門設計建立（昭和62年撮影）

この蚕室は二階建てで、屋根裏に屋根よりも緩い勾配で垂木が二重に架けてある。内側の垂木の上には筵を網で引き上げるようになっている。この筵の上げ下げによって室内の空気の調節ができる。床下には暖炉がある。この蚕室が建てられた年代は、金左衛門が『養蚕教弘録』を著した弘化四年（一八四七）以後、養蚕技術を彼なりに確立し、実行して、家督を長男に譲る明治初年までの間に違いない。ただし、その間に金左衛門は佐渡で蚕種の生産を試み、明治元年（一八六八）七万枚の製造に成功し

た。ところが佐渡の港の検閲で種紙を没収され、金左衛門は破産状態になった。よってその後数年間は蚕室を建てる経済状態ではなかった筈で、この数年間の前か後かは不明である。

5　桑屋

蚕に与える桑を保存するための小屋や室のことを桑屋という。桑屋は大概の家にあった。

桑の保存には数日間の貯蔵と一時的な保存の二つがあった。貯蔵の場合は地下室にした。一時的保存は、蔵の北側、石垣の北側、母屋の北裏、台所の一角など涼しく、風の当たらないところに小屋を作って保存した 土間に竹すだれを敷き、水を打ったり、桑にジョロで水をかけることもあった。

(1)塚田与右衛門の家の桑屋は南隣の家の北裏にある

(2)清水憲之助家の桑屋は二つある。一つは屋敷の南側を流れる川の石垣の北側の日陰にある。もう一つは前記蚕室の西の一室で、ここは南が土蔵の日陰になっているので涼しい場所である。

6　種室

蚕種は生物である。このため保存には注意した。昔は座敷（夏の間）に種掛けを置き、これに収めた。このため蚕種商人の座敷は蚕室同様に通風を良くする工夫をしている。後には蚕種庫、地下室、風穴、冷蔵庫が使われるようになった。

(1)清水憲之助家の座敷や広間には高窓や差し立て障子があり、空気の調節ができるようになっている。

(2)旧塚田与右衛門の家は蚕室の下を掘って地下室にし、ここに蚕種を保存した。この地下室は現存しているが長年使わないため現在は水が溜まっている。

7　塗籠造り・長屋門

清水浜臣の『上信日記』文政二年（一八一九）四月八日の項には「秋和村を経て塩尻山の麓をすぐ。ここの家居いとよし。大かたハぬり屋づくりなり。」とある。このように既に塗籠造りが多かったことが判る。その後も蚕種業で富を得た家では競って塗籠造りを建てた。例えば、利根島の馬場欽市家の母屋は塗籠造りの蚕室造りである。長屋門の例では前記の清水哲彦家や大村の馬場泉家の長屋門が塗籠造りである。

このほか塗籠造りの美しい蔵が殆どの家にある。

第９図　馬場欽市家　塗籠造り居宅
（昭和63年撮影）

８　強い西風に対する備え

上塩尻の家は殆どが南向きで、棟を強い西風の方向に合わせ、いわゆる「谷なり」に東西にしている。

また、「民家がこの風の当たる屋根の西側を針金で結んだ石をのせたり、西側にしぶき除けをつけている」(『上田盆地』上田市立博物館　昭和四三年)。

(1)前記の馬場桂三家は、西側に蔵を南北の棟に配し、蔵と母屋の西間の壁を羽目板で覆い、さらに母屋の西南に風除けの塀を高く立てている。

(2)元宿の馬場幸一家と馬場欽市家は母屋の西側に大きな蔵を棟を南北にして建て、西風を防いでいる。

西風を防ぐために蔵を屋敷の西側に配置した例は他にもある。

六　あとがき

以上、上塩尻について、養蚕農家集落としての背景の一端と北国街道の景観をよく残していることと、各時代の建物が残っており、このため蚕室造りの発展過程が段階的に判ることなどを紹介した。この景観と優れた民家は、正に集落全体が蚕室造りの生きた博物館といえる。

なお、この貴重な個々の民家と集落全体の調査を平成元年七月下旬に山崎弘氏（工学院大学建築学科・日本民俗建築学会理事）並びに津山正幹氏（日本民俗建築学会理事)、山崎研究室の学生諸君六名とともに行った。

この調査に当たって、田口光一氏、多田井幸視氏、上田市教育委員会の関係各位、上塩尻区長河合蔵人氏のご協力を頂いた。

また調査をはじめる前夜、地元の古老一〇名の方々に公民館にお集まり願い貴重な

お話を聞かせて頂いた。この席には上田民俗研究会の有志の方も同席された。

調査当日は、調査にお伺いしたお宅は丁度畑仕事に繁忙な時期にも係わらず実にご親切にご協力頂いた。中には今回は時間が足りずお待ち頂きながら伺えなかったお宅も何軒かあった。

特に、清水憲之助氏にはこの調査以前から種々ご教示頂くと共に大変お世話になった。この調査は今後も継続する予定なので地元の皆様に更に詳しい情報の提供とお気付きの点もご教示をお願いしたい。また調査結果は現地で報告会をする予定である。

ここにお世話になった皆様に深く感謝の意を表する。（平成元年八月一五日脱稿）

（東京都町田市玉川学園一ノ一ノ二〇）

所載：『信濃』第 42 巻第 1 号 pp. 23～35　信濃史学会　1990 年 1 月
テキストコード化・文書整形：長野大学前川道博研究室 2018 年 09 月 13 日